

第 10 回関西建築家大賞 審査結果及び審査経過について

審査建築家 坂本一成

審査結果 建築家大賞 受賞者なしとして
森下 修氏を 審査建築家奨励賞 と致します。

審査経過

第 10 回関西建築家大賞には 18 名の建築家からの応募があり、
6 月 29 日、綿業倶楽部にて一次審査である書面審査を行い、
応募建築家それぞれ 2 作品について提出書類、スライド等による審査で
以下の 6 名の候補者の作品を二次の現地審査の対象としました。

荒谷省午
生山雅英
貴志雅樹
宮本佳明
森下 修
山口 隆

12 作品の現地審査を 8 月 23 日、24 日の 2 日間に亘って行い、
上記の結論を得ました。

審査講評は別紙に示します。

第10回関西建築家大賞 審査講評

関西建築家大賞は大変ユニークな賞としても広く知られております。それは2作品（かつては3作品）を対象とした一人の建築家のみを受賞であること、そして重賞を不可としていること、また一人の建築家による審査であること等によります。

この賞の最も重要な点は、候補である建築家が過去10年間での2作品を取り上げる事で、いかなる建築を目指したか、そしていかなる成果を得たかを見せて頂く事です。つまり単独作品だけでは定位しにくい作品の内容に対して、2作品による文脈から建築家の創作の巾の広がりや今後の可能性等を確認できるということです。

この審査ではまず各作品から、コンセプトとも言うべき建築的構想・イメージや空間の構成形式、それらを具体化する計画的・空間的対応や素材・ディテールの扱い等を可能な限り様々な角度から読み取り、検討しました。そしてそれらが2作品の間で、どの様に推移したか、あるいはどのようなバリエーションとして展開されたか等の知見を得たいと思いました。こうしたことから社会的意味のある建築の新たな視点や概念をもったインパクトある建築を評価できればと考えました。

今回の2次審査の候補者の作品は、すべて水準以上の建築であったことは言うまでもありません。新鮮な構想やイメージを感じる建築、構成形式の素晴らしい建築、そして素材・ディテールの扱いの見事な建築、また新たな建築タイプを予感させる建築といった印象的な作品は多々ありました。しかし、これらを統合した建築家大賞に相応しい総合的に高いレベルの空間をもつ2作品を提出した候補者を、残念ながら選出することはできませんでした。

これまで様々な審査に携わりましたが、今回の審査ほど厳しいものはありませんでした。

現地審査の作品についての短評を下記に示します。

荒谷省午氏の2作品について

丁寧な設計から部位・分節の多様性とその統合が創り出す魅力的な建築の可能性を感じました。各種の素材の使われ方にも確かな存在感を見せてもらいました。2作品の関係の中に目指す方向が見出せれば良かったと思いました。

生山雅英氏の2作品について

ビルコン的技術と空間との結合による建築の可能性を感じました。素材感やディテールによる物質性の豊かさも見られました。また2作品の間に表現の巾の広さを知ることができました。更にその成果が伝わればと思いました。

貴志雅樹氏の2作品について

2作品とも町屋というタイポロジーの現代的意味を小スケールの中で獲得されておりました。このことは2種の新たな町家形式を求める事で建築の社会性を獲得することになります。次作を期待したいと思います。

宮本佳明氏の2作品について

2作品とも目指すものとしての構想・イメージが見事で、好感を持ちました。スケールのコントロール等が加われば更に現実との対応が有効となると考えます。今後を期待したいと思いました。

森下 修氏の2作品について

集合住宅のタイポロジーとしての社会性の試みとして、大変興味深い作品でした。関西の田園地帯と都市市街地、それぞれの在るべき集合住宅のタイプの提案になっていると思いました。より具体的なスケールや計画的・空間的対応によって更なる大きな成果が期待できると考えます。

山口 隆氏の2作品について

2作品ともアーティスティックなミニマリズム的空間の建築化の可能性を感じました。限定的な部分を超えて、広がりのある展開が可能になれば建築のミニマリズムの意味を更に強められると思いました。